

真夜中のボクサー



角川書店

昭和五十七年七月三十一日 初版発行

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三

電話(〇三)二六五—七二一—(大代表)

〒一〇二 振替東京三一—九五二〇八

真夜中のボクサー 高橋三千綱



発行者——角川春樹

印刷——大日本印刷株式会社

製本——株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

© Michisuna Takahashi, 1982.

0093-872339-0946(0)

真夜中のボクサー

目次

冬の藪蚊ふゆのか

七

河面かわも

三

曙あけぼの

七

さらに北へ

五

波間

六

夜汽車

八

発熱

七

汗

三

根雪

一二四

影

一三九

木洩れ陽^{こも}

一五五

湯氣を透かして

一七〇

夢の雫^{しずく}

一八四

流水の音

二〇〇

孤氷

二二七

初出誌一覧

二三四

装丁
渋川育由

真夜中のボクサー

冬の藪蚊^{やぶか}

真夜中になると腹が減った。四畳半の畳には、低い机が一つと、古い電熱器があるだけだった。机は、以前住んでいた学生が置き去りにしたもので、電熱器は、野原の隅に片手のもぎれたミルク飲み人形と一緒に捨ててあった。

電熱器は、使いものにならなくなっていた。拾って部屋に持って帰り、スイッチを入れるとニクロム線から青白い炎が立ち、それきりつかなくなった。放置しておいても直る見込みはなく、直すつもりもなかったが、電熱器は、錆びついた腹を見せて、そのまま部屋に居ついた。

電球は二十ワットの光の弱いものだった。アパートの共同便所にあつたものを盗んで部屋のソケットにつないだ。初めは暗い気がしたが、慣れると、老婆が月明りの下で影を引いているような、力のない灯りに親しみがもてた。

部屋の中は寒く、夕方になって、一時間ばかり北国の西陽が硝子に射すだけだった。陽が落ちると、空気が凍りついた。疲れて眼を天井に向けると、そこに、つららが垂れている気がした。天井の隅に張った蜘蛛の巣は、泥につけた綿のように見えていた。夏の終りにひっかかった蛾が変色し、翅に白

い黴が生えていた。巢の持ち主も、十一月に入ると姿を消した。外の音が跡絶え、アパートの住人も寝静まると、部屋は、夜の中で寒気に縛られ、身を縮めた。

染みの広がった壁は筋肉を縮め、虫の食った柱は血管を縮めた。電球だけが、寒さが増すにつれて、彩光を強めた。坐っていると、腰に冷気が沁み込み、背骨を、浜に打ち捨てられた枯木のように乾いたものにさせた。股には、絶えず鋭利な針が落ち、冷たい皮膚の痛みが、神経を麻痺させた。

寒さはいづれ過ぎ去っていくが、胃袋は、時間がたつと空腹を訴えてきた。水を飲むと刺激を与えて、日中は飲まず食わずで過ごした。

一日のテレビ放送がすべて終ると、周囲の物音が跡絶えた。それからかっきり一時間、膝を抱えて芋虫のようになり、尾骶骨を軸にして屈めた身体をゆっくりと揺すり続けた。胃液が揺れて、胃壁を舐め始めるのを感じた。

それから、外に出た。

ジャンパーは小さすぎて肩に張った。運動靴は親指を締めつけていた。いづれも、冬が来る前に、二時間ほど歩いたところにある少年野球場から拾ってきた。

アパートに移ってきたときから着ているスポーツシャツは、埃と湿気をたっぷり吸い込んで、なめし革のように重くなっていた。襟は垢で固くなり、袖口はすり切れていた。そいつは寝巻きになり、外出着になった。

ジャンパーのポケットに手を突っ込み、首筋を張って歩いた。丸まった足の親指は、ゴム靴の底が小石を踏まえるたびに、小さくうずいた。親指の先には、マメが出来ていた。

夜の中で吐く息だけが、生命を主張した。外界にとび出し、冷氣にあてられて、胃袋に納められた白魚のように響き、とびはね、あっけなく消える。歩く速度に合わせて、吐息は現われ、消滅をくり返していた。

数か月前、私鉄のはずれに近い駅に初めて降り立ったとき、街は夕立の下に沈んでいた。野原や畑、いじけたように寄り添う人家の向こうに山があり、雨がやむと、山の上に虹が張った。

紫に煙った山は、光を包み込み、見る者の甘い夢を拒絶した。一軒だけあった不動産屋を訪ねて、空部屋を訊いた。

教えられたところにいつて、部屋はないかと訊いた。あると男は答えた。不動産屋から聞いたといえは礼金をとられるので、通りがかりに入った様子を取りつくろった。部屋代を払うと、かろうじてひと月分の食費だけが残った。それも、秋がくると、なくなった。

野原を越えて、棘とげを含んだ風が顔面に当たってきた。下から鼻孔に当り、臉に涙を浮かせた。耳に感覚がなくなり、足が硬直した。

十五分歩くと、駅前に出た。終電の通り過ぎた駅舎は、食肉牛の死骸のようにぐったりと星の下にうずくまっていた。無人の踏切を越えると、白壁のレストランがあった。

小さな街には不釣合なほど贅ぜいを尽した造りで、六角形の建物の窓には、厚い防音ガラスが、汽車のビュッフェのように広くはめこまれていた。

レストランの中は暗く、すべての物が闇の中で深い眠りに落ちていた。月明りが駅舎と野原を銀色に染め、レストランの窓にそれらの輪郭を、影絵のように映し出した。

小石の転がった駐車を抜けて、レストランの裏口に回った。霜が小石を持ち上げ、運動靴の底を冷たい舌で舐めた。湿りは裏の戸の前に立つころには、運動靴の布を浸蝕して、素足の皮膚を打ち碎いた。

釘を取り出して鍵穴に差し込み、引き上げた。金属の噛み合う音がして、錠が開いた。背後の雑草がそよぎ、カミソリのような風が首筋を斬りつけてきた。

戸を開けて中に入った。突き当りのドアはバーカウンターへ通じる戸口だった。初めてこのレストランに忍び込んだときは、カウンターの内側に置いてある冷蔵庫の中をさぐり、生卵を四つ飲み、チーズを齧った。

壁づたいに左手に進むと、一段低い床がある。鉄板焼のカウンターがあり、そこでコックが二人連れの男女や、女に去られた男の愚痴話を鬱屈した面持ちで聞きながら肉を焼く。光の下で、カウンターの前に肘をついて、肉の焼き上がる匂いに心をなごませる客の姿は、硝子窓の外から見ると、金魚鉢の底に沈んでいる腐った藻になった。

すべての客が満腹して帰り、コックは鉄板を洗い、ウェイターが床の掃除を終えると、店主は脂ぎった頬に浮いた濃い毛穴を指の腹で撫でつけ、明りを消して店を出る。

人間が立ち去ってから二時間後には、店の中は静寂と冷えた空気の中で凝結した暗闇の粒子に支配される。

タイル張りの床を踏みしめると、その暗い粒子は、アメーバーが溶けていくように、手足を縮めていく。人の気配を感じて揺れる闇の粒は、そのとき、透明になる。

暗い店の中に、青白い月明りが流れ込んでいた。テーブルは、山奥に隠れた池の面のようにゆがんでぼやけた光を反射させた。

大型の冷蔵庫を開けると光が溢れ出てきた。素早く腕を動かし、昼のうちにコックが仕込んだ、木のボウルに入った野菜サラダと生ハムをつかむ。閉じると、押し込まれるように光は冷蔵庫の中に戻っていく。

棚に置いてある食パンを取ってサラダとハムを挟む。食パンは半斤ほど残っていた。床に屈み込み、大急ぎで食った。喉がざらつき、胸がつかえた。サラダの弾ける音が、口の中を刺激した。

ハムは、甘く舌にからみついてきた。それらを、噛みしめるたびに、身体中の血が躍った。頭の中に固まっていたものが徐々に溶け始め、足の指先ばかりが、締めつけてくる寒さに抵抗を示した。床に残った水を、運動靴の先がすくった。

食べ終ると、二きれの食パンをジャンパーのポケットに突っ込んだ。余分な収穫があるのは珍しいことだった。

冷蔵庫を十センチほどあけて、腕を伸ばして牛乳壺を手にとった。引き出し、一息に飲み干した。頭が痺れ、胃が渴きをいやした。

空嚢を床の隅に並べ、冷蔵庫の一番上に載っている生卵を三つ揃いでドアを閉め、その場で三つとも飲んだ。殻はポケットに入れ、カウンターと並行に背骨を屈めて、戸口までたどりついた。

外に出て、深く息を吸った。吐息は夜空の深みを背景にして、吹き出した雲のように伸び伸びと形を変え、流れて消えた。卵の殻を野原に向って投げつけた。

裏口から駐車場に出て、レストランの前に戻った。街は、深い眠りに落ちていた。夜空を流れる雲は、腹一杯月光を吸いとり、急ぎ足で南の空に流れていく。雲が視界をよぎると、荘厳な宇宙が姿を見せた。

踏切を渡って、舗道を歩いた。靴の裏はアスファルトに吸いつき、凍りはじめた商店の前に流れた水を、砕いた。

酒屋の脇に積んであるケースの中から、ビールの空壇を四本抜き取った。まだ五本残っていた。少しためらい、一本を戻した。

夏場には、空壇が山と積まれた酒屋も、十二月を前にして、空壇の出る量が、十分の一に減った。夏は二十本くらい盗んでも気付かれる恐れがなかった。それを、この街にもう一軒ある酒屋に持つていつて金と引き換えた。その金が部屋代の一部になった。足りないときは、自動車の予備タイヤを盗み、隣の街の修理工場まで売りに行った。そこにいる腕のよさそうな修理工は、タイヤよりバッテリーの方が金になると言い、新しいバッテリーが格安で手に入るのを心待ちするようになった。バッテリーは、一度盗みを試みて失敗して以来、手を出すのを控えた。

両手にビール壇を持ち、隙間なく落ちてくる針の先のような寒さの中を歩き出した。すぐに、後の方で空気が騒ぐのを感じて振り返った。

路上は静まり返り、巨大な氷の中を覗いた時のように、月の光が野原と家々を緊迫した夜の中に浮き彫りにさせた。

十分歩くと、人家がまばらになった。畑は乾いて固くなり、冬に強い雑草が生えだしていた。

地ならしのすんだ空地の隣にアパートがあり、パイプ製の手摺に手をあてて二階に登った。

部屋の中は、外に比べると格段の差の暖かさがあった。今週になって、ビール壺は十八本になった。それを、押し入れにしまった時、ドアの外に人影が射した。部屋の中が張りつめた。

琴線を弾くような空氣の擦れ合いが、ドアの外から斬り込んできた。息を殺し、ドアを凝視した。ふと、ドアの周囲にある空氣がゆるみを見せた。すかさず、ドアを開いた。

三十前の若い男が立っていた。厚手のコートを着て、襟には毛皮がついていた。同じ年ぐらいだったが、背が高く、見上げないと、男と視線を合わせることができなかった。

見下ろす眼光に敵意が宿っていた。唇の脇に肉のえぐられた傷が五センチ程走り、男が笑うと、傷はぱっくり開き、赤黒い肉を覗かせた。

この街に住んで四か月が過ぎた。他人と話すことはなく、顔を見合わせた女もいなかった。身動きのままならない水槽の中にいる金魚は、しかし、外の世界を眺めることができた。果てのない夢は、一枚の硝子をへだてて際限なく広がり、そして、眼をしばたたくと、冷たい水に鰓を押さえ込まれて生きていた。それは、それなりに満足のできる生活だった。

——つけてきたのか。

男は口元だけに笑みを浮かべて、一重瞼の眼尻を吊り上げた。

——それほどの大物でもないだろ。

荒んだ口調でいって、部屋の中に足を踏み入れた。もて余すような長い足を腰のあたりまで持ち上げて、片方の靴を脱いだ。

この街の人間のほとんどの顔を知らなかったが、男には見覚えがあつた。何をするでもなく、通りをブラついてた。道の両端を互いに歩いていて、感じる視線の先に、男がよくいた。いつでも、唇をねじ曲げて笑っていた。

— 何の用だ。

— 分つてねえな。仲間になりたいだけだよ。

— 仲間？

— 午前二時に、きまつて街を野良犬みてえに歩く奴はそういないさ。ビール壺を集めるみてえなケチな商売はやめろよ。

犯罪者として見られているのなら、それでもよかった。必ずしも間違いではない。だが、犯罪者にはなりきれずにいる男が、犯罪者と同じ眼で期待されるのは、荷がかちすぎた。犯罪者は、昼間の人間だ。姿を人前にさらせばさらすほど、正当化される。

— おれはあっちこっちから追い出されてきた男でね。この土地には、おれの昔の女がいたのさ。入院しちまったよ。片脚を股の付け根から切断したのさ。轢^ひき逃げよ。

もう片方の靴を脱ぎ、男は部屋の中に入り、壁を指で弾いた。

— ここにいる奴等はいないじていてな。ラクして金を儲けようなんて健康的なことを考えるやつはいないのさ。シコシコ働いて、それ相当の金をもらつていじましく生きているのさ。

— 帰れ。

— 市役所にいるやつ、ちっぽけな靴屋の親爺、八百屋の小僧、みんな、四十年も俯いて働き、く